

## アイランドキャンパス事業 成果報告書・提言書

平成 24 年 (2012 年) 2 月 24 日

鹿児島国際大学国際文化学部人間文化学科教授  
野中 哲照

事業名：硫黄島の回遊式観光の提言および史跡探訪マップの作成  
テーマ：交流人口の拡大を図るための観光振興の方策について  
実施場所：硫黄島（鹿児島県鹿児島郡三島村）  
実施期間：平成 23 年 9 月 23 日（火）～9 月 24 日（水）  
代表者名：鹿児島国際大学国際文化学部人間文化学科教授 野中哲照

上記の実施期間（平成 23 年 9 月 23 日～24 日）とは、代表者（野中）が 3 年生のゼミの学生とともに硫黄島に赴き、調査した期間であるにすぎない。実際にはそれ以前に延慶本『平家物語』の分析や事前準備を周到に行っており、同年 8 月 25 日（木）に三島村役場を訪問し、柿木正敏教育長、山口六夫教育委員会事務局長、岩切重同参事と打ち合わせを済ませている。また、事後も、同年 10 月 14 日（金）に三島村役場を訪問し、日高郷土村長、柿木教育長、岩重参事に成果の中間報告を行い、さらにその後もこのプロジェクトの目標に沿ってリーフレット作成に多くの時間と労力を割いた。野中はさらに単独で、平成 24 年 (2012 年) 2 月 13 日～14 日にも硫黄島を訪問し、追加の調査を行った。よって、以下に述べる報告とは、上記「実施期間」に行ったことのみではなく、この半年間に行った活動のすべてである。

そもそもこの企画は、硫黄島の平家伝説があまりにも輻輳していたり、玉石混淆であったりして、せっかくの魅力を十分に発揮しえていないと考えたところから出発している。そこで、学術的な立場から史実的な伝承と後世に付会された伝承とを分け、第一次平家伝説（俊寛関係）、第二次平家伝説（安徳帝関係）、第三次平家伝説（薩摩平氏関係）と峻別した。その上で、観光振興に役立つようなリーフレットを作成した（学術的には「平家伝承」と呼ぶのが一般的だが、観光振興のためのキーワードとしては「平家伝説」と呼ぶのがふさわしいと考え、後者を採用した）。

ここまでの、当初の計画書に記した内容である。ところが、当初の計画を超えるきわめて大きな成果があった。それは、延慶本『平家物語』がかなり史実を反映しているらしいことが裏付けられたということである。簡単に列記する。

- 1、配流された3人が紀伊の熊野三山を硫黄島に勧請したというのは事実であることが判明した。
- 2、俊寛堂と、和歌山の熊野本宮の立地は酷似していることが判明した。
- 3、東温泉近くに滝がみられるが、これが和歌山的那智の滝に相当し、滝の形状・景観も酷似していることが判明した。
- 4、配流された3人が最初に住んでいたのは、硫黄島北部の大谷（ウータン）であることが判明した。
- 5、硫黄島の稲村岳の古い名は蛮ガ岳であること、硫黄岳鎮火の守護神であることが判明した。
- 6、稲村岳の北東麓にある「岳の神」の性格は従来明らかにされていなかったが、稲村岳という御神体を崇める遙拝所であることが判明した。
- 7、島内にある中世山城4城は、室町期の海賊対策の城であり、南北朝時代に南薩の各氏が南朝方であったことと通じているらしいことが判明しつつある。

これらの成果はいずれも大発見ともいえるべきもので、6か月以内に論文化する予定（「鹿児島国際大学国際文化学部論集」に発表予定）であるし、新聞発表も行う予定である。このうちの一部はすでにリーフレットに盛り込んでおり、「熊野三山めぐりルート」「聖跡めぐりルート」「山城めぐりルート」として回遊式観光をアピールすることが可能となった。これらは、硫黄島の新たな観光資源を発掘したものといえる。アイランドキャンパス事業に採択されたおかげである。厚く御礼申し上げたい。

学生の関与について、報告しておく。ゼミの学生8名は、事前学習から参加し、事後のリーフレット作りまで、若い目から見てどうすれば魅力的か、わかりやすいか、という観

点からのアドバイス役となってもらった。また、学生の視点から、島内の史跡の、どこにどのような説明板が必要か、道や階段を整備すべき個所はどこか、みやげものとしてどのようなものが開発できるか（キーホルダー、携帯ストラップについての提案が出た）、などの意見を出してもらった。これを、三島村役場に提言してゆきたい。

三島村役場に対して強く提言したいことは、ホームページが見にくく、内容も充実しているとは言えないということである。観光振興にしても、定住促進にしても、ホームページの充実がなされていなければ、前途が危うい。現在は総務課職員が業務の一環としてホームページを管理しているとのことであったが、今後はぜひともホームページ管理の専従職員を置くべきである。ホームページの内容面の充実については、今後とも提言というかたちで協力していきたい。

なお、通常のアイランドキャンパス事業は、現地（離島）でシンポジウムや住人との交流を行うものだが、本企画ではそのようなことは行っていない。あるとすれば、三島村役場硫黄島出張所所長の徳田和良氏に現地を案内してもらったことがこれに相当する（9月13日と2月13日）。つまり、現地で集会を開催する代わりに、現地の案内人と共同で徹底的に現地調査を行い、新たな観光資源を開拓し、リーフレットを作成したのである。その結果が、別添のリーフレットである。

ただし、惜しむべきことは、当初は数千部程度（最大1万部が目標）の印刷部数を考えていたが、それが叶わず、レーザー・プリンタ印刷によって、この報告書に添付したり三島村役場に提出したりする程度の部数しか印刷できなかつたことである。マップのデザイン料だけで7万円かかり、そこからオフセット印刷の版を作るだけで5～6万円かかり、1万部印刷するとすればさらに約10万円加算される。現地調査にかかった費用を差し引くと、とてもそこまでは捻出できなかつた。よって、当初の計画からすれば、達成率は9割程度と自己反省している。ただし、当初は想定もしていなかつた上記のような大発見が続出しており、今後、これらが観光振興の起爆剤になる可能性を有している。その成果の大きさは、何にも代えがたい。積み残した課題は、次年度以降に送りたい。

以上